

書下し長篇ハードバイオレンス

ろくでなし

広山義慶

Yoshinori Hiroyama



DO-SATSU

TOKUMA NOVELS



TOKUMA NOVELS

広山義慶

ろくでなし 怒殺

発行者 牧田謙吾

発行所 徳間書店

東京都港区東新橋一ノノ一六 一〇五―八〇五五

電話〇三・三五七三・〇一一

振替〇〇―一四〇〇―四四三九二

©Yoshinori Hironaka 2000 Printed in Japan

落丁・乱丁はおとりかえいたします

〈編集担当 磯谷 励〉

ISBN4-19-850509-8

書下し長篇ハードバイオレンス

ろくでなし 怒殺

広山義慶



徳間書店

TOKUMA NOVELS

目次

一章 闇討ち

7

二章 墮落

36

三章 殺人事件

61

四章 地虫

88

五章 誓い

115

六章 探索

142

七章 悪党狩り

171

八章 叩き殺す

200

エピローグ

240

一章 闇討ち

Ⅰ

「モシモシ」

「……………」

「モシモ―シ」

「……………」

「モシモシッ」

「……………」

ガチャリ！

無言電話――。

このところ、毎晩これだ。

午前零時を過ぎると、必ず家庭電話にかかってくる。

零時前にかかってくることはない。俺が夜型の人間だってことを知ってるらしい。

俺？

三橋玄章。虎ノ門にある味木法律事務所の司法調査員。

並みの調査員じゃない。超腕っこきのナンバ

―1調査員だ。味木法律事務所の御大・味木進之助ってのが、最高裁の判事を永年務めた法曹界の首領ドンのような人物で、味木法律事務所は日本で一番の法律事務所といわれている。

ということは、俺も日本一の調査員ってわけだ。

ま、あまり大きな声ではいえないが、弁護士なんてのは頭でっかちで悪知恵だけは働くが身体のはうはまるで動かねえ。脳味噌かたまりだけの悪知恵の塊かたまりと思えばいい。その手足となつて働くのが司法調査員。どんな調査員を抱えているかで、法律事務所の値打ちは決まる。頭でっかちの知恵者をどんなに掻き集めたつて、手足となつて動く者がいなければ屑くず集団と同じだ。それによ、司法調査員にしたつて、ピンからキリが

ある。俺はピンの中のピン。

だから、ま、言いたくはねえが、味木法律事務所は、俺で保もつていようなもんだ。

なにしろ俺は強い。バカ強い。桁外けたはずれに強い。強すぎて警視庁をクビになつたんだ。

そう。俺は元本庁華の捜一のスーパ―刑事。

が、まいい。昔のことは忘れた。

要するに俺はいまも「スーパ―調査員」だつてことだ。

年齢は、ま、男盛りとだけ言つとこう。

身長は、……ま、そんなことはどうでもいいか、胴長、短足。純日本人の体型だ。

それでいて強い。俺のくり出すパンチは岩をも砕くし、俺の放つキックは風をも切り裂く。

無言電話？

そうぞ、その話だ。

最初はいつだったかな。十日ほど前だったか……。

ひと仕事終えたので、呑んで酔っぱらって気がついたら谷中^{やなか}のマンションのベッドの上で、見知らぬ女とマンコやってたんだ。

ま、よくあることさ。

言い忘れたが、俺は独身。結婚経験のない根っからの独身。

だから自宅のベッドへ毎晩女をご招待したって文句を言う者はいない。ひとの女房であれ、ひとの恋人であれ、素人娘であれ、性風俗の女であれ、どんな女であつても、誰も文句は言わない。

その夜の相手も、どこかの呑み屋のホステス

か、客の女だった。俺はあんまり女を差別しない。

美人がいいとか巨乳がいいとか選り好みの強い野郎つてのは、要するにモテねえ男どもだ。俺はモテる。男にも強いが、女にはもつと強い。

だから選り好みはしない。

若くてピチピチしてればいい。オッパイなんて、あればいい。裏表がわかればいいんだ。顔だつて十人並みで充分。肌の色だつて、白くても黄色くても黒くてもいい。

できりゃあ巨乳でなく、巨尻がいい。それだけだ。

その女が巨尻だったかどうか、何も覚えていない。やってる最中に電話が鳴りやがった。

俺は気にしなかった。

時刻は何時だかわからなかったが、とつくに午前零時は過ぎている。そんな時間に家庭用の電話に電話をかけてくる奴はロクな野郎じゃねえ。仕事上の急用なら、携帯にかかってくる。俺は気にしねえで腰を動かしつづけたが、女のほうが気にしやがった。

「ねえ、出てよ、気になってイケないじゃないの」

そう言われちゃ、出ないわけにはいかない。こういうものは、お互いにイカねえと面白くもおかしくもねえからな。

俺はベッドを降りてリビングルームの電話に近づいた。

「モシモシ」

当然、機嫌がいいわけはねえ。恐ろしげな声が出た。

「……………」

返事がない。

「モシモシッ」

さらに声は怒気を含んだ。

「……………」

無言だ。

だが電話を切る気配もない。

「イタズラ電話かい？」

「……………」

「ご苦労なこった」

俺は電話を切った。

翌日も俺は酔っぱらっていた。ひと仕事終ると四、五日はギャンブルと酒と女で生命の洗濯

をしたくなる。

翌日は別な女だった。

俺も女もへべれけに酔っていたらしく、下半身だけ脱いでリビングルームで始まっちゃった。

女がテーブルに手を衝いて、俺が女の尻を抱えて、その脇のチェストの上に電話があった。

手を伸ばせば軽々と届く距離だ。

だから鳴ると同時に手が伸びた。

「モシモシ」

「……………」

「モシモシッ」

「……………」

そこで俺は気がついた。

「昨夜の野郎かい」

「……………」

俺が電話をしてるのに、女のほうは気づきもしねえでよがり声を上げつつけ、尻を振りつけている。エクスタシー寸前ってわけだ。

仕方がねえから俺も片手で女の尻を支えて突きつづけた。

「いいもの聞かせてやるぜ」

俺は受話器を女の顔に近づけた。女の声がばつちりと電話の向こうへ届いたはずだ。

「お聞きのとおり、いまは忙しいんだ。またにしてくれ」

そう伝えて電話を切った。

その翌日のことは覚えてない。多分、酔っぱらって帰って寝ちまったんだろう。

その次の日は、昼間松戸まで競輪に行って、帰りに雀荘へもぐりこみ、しこたま稼いでタク

シーで戻って来たのが午前四時。

電話はあったのかもしれないねえが、俺は留守だったというわけだ。

はつきりと覚えているのは昨夜のことだ。浅草のキャバクラの姐ちゃんねえと意気投合して呑みに行き、終点の俺のマンションへ着いたのが午前三時頃。

姐ちゃんはすっかり舞い上がっていて、ゲラゲラ笑いながら自分から着ているものを、俺の目の前で脱ぎ出した。ストリップチーズというわけだ。脱ぎっぷりも脱ぎ方も堂に入っている。ストリップガールをやったらしい。

俺も着ているものを脱いで、最後の一枚は姐ちゃんが脱がしてくれて、その下から現われた俺の立派なものをパクリと咥くはえた。

いい進行だった。

今夜もいい夜になる——そう思ったとたんに電話が鳴りやがった。

ホラ来た、と俺は受話器に手を伸す。

「モシモシ」

姐ちゃんは電話などおかまいなしに俺のものを口の中でこねくりまわす。

「モシモシ」

「……………」

「今夜もやってるぜ。声を聞かせてやろか」俺は受話器を姐ちゃんの口許くちもとに近づけた。

「何？」

姐ちゃんの酔眼がびっくりしたみたいに俺を見上げた。

「無言電話だ。よがり声でも聞かせてやりなよ」

「え?!

姐ちゃんが後ろへ吹っ飛んだ。尻餅をついて大股開きになったかと思うと、まるで弾はじかれたように脱ぎ捨てたものを拾い集めて帰り仕度にかかった。

「どうしたんだい」

俺はわけがわからなかった。

「電話を切つてよッ」

姐ちゃんが声をひそめてヒステリックに叫んだ。

「あばよ」

俺は無言電話の相手にそう挨拶あいさつして受話器を戻した。

「どうしたんだよ」

姐ちゃんはパンティをはこうとしているがあ

わてているのと酔って足許がふらつくのとで、なかなかはけない。

「亭主かもしれないわよ」

姐ちゃんは恐怖の眼で電話を見やった。無言電話の相手のことを言ってるらしい。

「亭主? あんた亭主持ちなの?」

亭主持ちには手を出すな——常々俺は自分にそう言いきかせている。

俺はひとにロクデナシだと言われ、ときたま自分でもそうじゃねえかなと思うこともあるが、常々自分では紳士でありたいと希ねがっている。

紳士たるもの、ひとの女房に手を出すなんてことはしちやいけねえ。そう思って自戒じがいしてるんだ。

「別れた亭主よ」

半年前に離婚したという。

それを聞いてホッとした。それならいいんだ。

「別れた亭主がなんで俺んところへ電話をしてくるんだ？」

まるつきりわからねえ話だ。

「しつこいのよ」

「姐ちゃんのこと忘れられねえってわけか」

「私の後を尾けてんのよ、ストーカーよ」

「それで俺んところへ電話をかけてきたってわけ？」

「そのくらいのことする男なんだから」

「ちよつと待てよ。無言電話は今夜が初めてじやねえ。もう十日近く毎晩続いてるんだ」

「？」

さすがに姐ちゃんは、自分の恐怖心が杞憂きゆうだ

と気づいたらしい。

「ほんと？」

「ああ。言ってみれば毎晩の常連さんみたいなもんだ」

「それで、平気なの？」

「何が」

「気にならないの？」

「気にするほどのことじゃねえだろう」

俺が言うと、姐ちゃんは改めて俺の顔を見つめ、

「やっぱり帰る」

そう言い残して、逃げるように出て行つた。

何か怖がらせるようなことを言つたかな――

俺はしばらく考えたが、何も気になることはない。

そして今夜だ。

「モシモシ……こちら三橋玄章。味木法律事務所のモンだ。用があつたら、昼間事務所のほうに電話をくれ」

ガチャン

乱暴に電話を切った。

昨夜の姐ちゃんがなんで怖そうな顔して帰っちゃまったのか、やっとわかった気がした。

やつぱり、連夜続く無言電話なんてのは、気にしなくちゃいけねえよな。それが普通なんだよな。

2

殿台弁護士が訊いた。

「わからねえ。不特定多数だな」

俺が答えた。

「不特定多数？　大丈夫ですか、病気のほうは」
真面目な殿台弁護士が真面目に言った。

「病気？　やばい病気のことか？　それなら心配ねえ」

「ちゃんと予防措置^{そち}をとってるんですね」
コンドームを使ってるかってことだな。

使っちゃいねえ。けど俺は真面目な殿台弁護士を心配させちゃいけねえと思って、

「そういうことだな」

と、答えた。

「年齢^{とし}はいくつになりました？」

「年齢？　そんなことが関係あるのかい」

「玄章さん、何人愛人います？」